

ブドウ「べと病」診断に利用

AIの活用は地場産業の蓄積され、「ようやく発生現場にも広がっている。勝沼醸造（甲州市勝沼町下岩崎）は、ワインの醸造用ブドウの栽培で、収穫前のブドウが結実不良を起こす「べと病」の危険性を把握し、防除につなげようと、AIの活用を始めた。

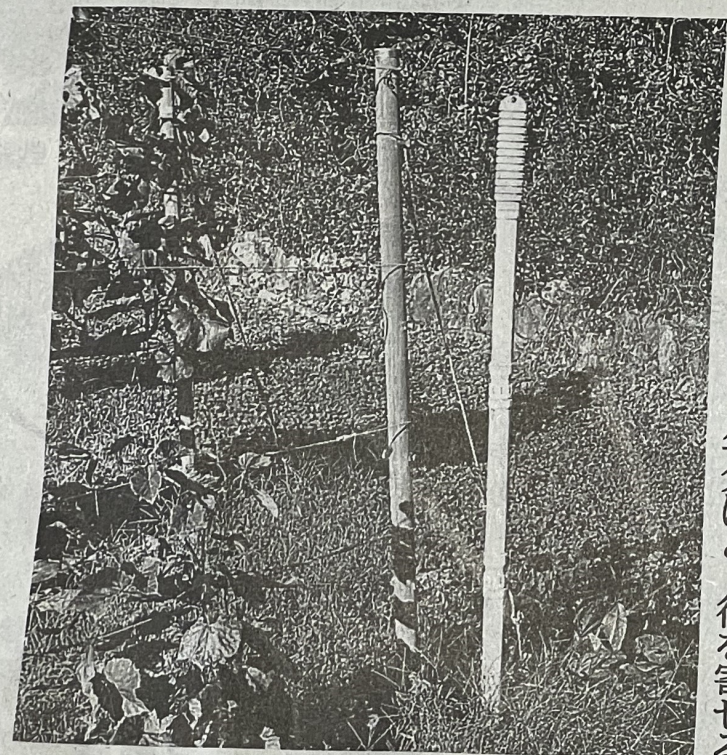
有賀雄二社長は従来の防除について「『昨年も病気が発生したから、怖いからやっておこう』という判断が多かった」と指摘。有機栽培や減農薬栽培のニーズが高まる中、被害の危険性が高まった場合だけ最小限の農薬を散布することで「今まで不可能とされていたブドウの無農薬栽培も可能になる。将来的には産地全体で活用し、ブドウの品質向上につなげたい」と期待を寄せる。〈渡辺真紗美〉

システムはシー・シー・ダブル（CCW、東京）が開発。農場に直径6センチ、高さ150センチのセンサーを設置し、温度や湿度、地温、地中の水分量などを測定。データを基にAIで病原菌が活発化する危険度を「高・中・低」の3段階で判断し、栽培者のスマートフォンに通知する。

気象条件や病気の発生に関するデータは5年分ほど

温度や湿度などのデータを収集するセンサー

＝甲州市内



温度や湿度などのデータを収集するセンサー 甲州市内